

2023年5月21日 礼拝メッセージ

「神、共にあり。今も、かつて、いつまでも」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 28章 16-20 節

一昨日の19日から、今日までの3日間、広島でG7(主要7カ国首脳会議)が開催されています。なぜ今、広島で開催されたのか、と言うと、それは昨年2月から続いている、ロシアとウクライナの戦争を受けて、いよいよ核兵器が使用される危険性が高まったから、ということなのだと思います。しかも、昨日の午後には急遽ウクライナからゼレンスキー大統領が到着し、今日会議に出席すると報じられています。ロシアに対して、国際社会の姿勢を示すということや、戦車や戦闘機などの軍事物資等々のさらなる支援を取り付けるためかと思われます。

言葉の上では、「核不拡散・軍縮」と言いながら、ここ数十年の間に、世界では核兵器がますます増えて来ました。ロシアだけでも何千発もの核兵器を持ち、広島や長崎に投下された原爆よりも、更に破壊力の大きな核ミサイルが、いつでも発射できる状態にあるとも言われています。戦争が長引けば長引くほど被害は増えて来ます。親しい人たちが前戦でその命を奪われて行った時、残された人たちが、「あの人の死は何だったのか。決して犬死させたくはない。仇をとってやりたい」と思ってしまうのも、人間の感情の働きであるということを考えてみると、戦争が長引き、被害が増えれば増えるほど、後には引けなくなっていってしまうことも分かります。そうなってしまった時に、^{こうちゃく}膠着してしまった状況の中で、核兵器の使用が「絶対にない」とは言い切れないのではないかと、というのが心配です。

経済学者の安富歩さんは、現代を生きる私たちは皆、生まれた時から全員が首に縄をかけられている状態だと表現されています。戦争の相手国だけに留まらず、この地球に生きる人類全体を何度も何度も絶滅させ得るだけの核兵器を何千発も持っている^{こんにち}今日、いつ、どこで、誰かによってそのスイッチが押されてもおかしくはない。いつ、自分たちが立っている床が突然抜けるかもしれない。それが現代の世界です。それでも「大丈夫、大丈夫。もう何十年間も使われていないから、きっと大丈夫。世界平和のためには、お互いの首に縄をかけておくことが大切なんだ」と言われ続けながら、私たちは日々の生活を送っているわけですが、果たしてそこ

に本当の「平和」、心からの「安心」はあるのでしょうか。

原子力発電にしても、地球環境破壊問題にしても、公害問題にしてもそうですが、自分たちの命を脅かすもの、自分たちに都合の悪いものには、見て見ぬふりをして、「首に縄なんてかかっていないよ」と言い張る生活の中に、本当の幸せというものはありません。そのような「そんなこと、考えても仕方がない。だから、今が楽しければいいじゃないか」というような享楽主義が、ますます幅を利かせていること、背景には、そのような恐怖の現実から、目を背け、忘れよう、考えないようにしようという、事実隠ぺいの志向があるのではないかと感じています。時代が進むにつれて、世の中はますます便利になり、快適になって来ているはずなのに、人の心はますますささくれ立ち、荒んで来てしまっているのは、コンピューターに代表されるコミュニケーションのあり方の変化というだけではなく、隠ぺいの上に隠ぺいを重ねて来ているという社会全体の根源的な問題の所為ではないかとも感じています。

私たちはまず、事実を事実として認めること。命を破壊するものについては、明確に否を唱えることから始める必要があるのではないのでしょうか。首に縄のかかったまま、安心して、幸せでいられるはずがありません。本当の「平和」は、自分の心をごまかしたり、嘘をついたりする所からは、創り出していくことが出来ないのだと思います。

さて、今回の聖書のお話は、「マタイによる福音書」の最後に書かれているお話でした。舞台はイエス様が生まれ育ち、そして活動されたガリラヤです。イエス様が十字架に架けられて処刑され、お墓に納められたのは、ガリラヤからずっと南にある都エルサレムでした。そこで死の3日目に引き起こされたイエス様が、お墓にやって来た女性たちに告げたのが、「恐れることはない。行って、きょうだいたちにガリラヤに行くように告げなさい。そこで私に会えるだろう」(28:10)という言葉でした。その言葉を受けて、弟子たちはエルサレムから再びガリラヤへ戻って来たというわけです。ガリラヤという場所は、単にイエス様が指示された場所というだけではなく、彼ら弟子たちが元々イエス様と出会って、行動を共にしていた場所でした。言い換えれば、自分たちの本拠地、「ホーム・グラウンド」とも呼ぶべき、自分たちの元々の居場所、華の都から遠く離れた「辺境の地」「異邦人の地」(イザヤ

8:23)に、紛れもない復活のイエス様は待っておられるということでした。

そこで弟子たちは、復活のイエス様と再会しましたが、17 節を見ると、弟子たちの中には「疑う者もいた」とあります。ギリシャ語の直訳では、あっちかこっちか「迷う者」ですから、目の前にいるこの人が、本当に復活のイエス様なのかどうか、戸惑っていたのでしょう。2000 年前の生前のイエス様をよく知っていた弟子たちですらそうでしたから、今日私たちが「復活のイエス様、今も生きておられるイエス様なんて、どこにいるの?」と疑い戸惑うのも、当然のことなのだと思います。

19 節 20 節は、イエス様による「大宣教命令」と呼ばれている言葉です。この言葉に基づいて昔から多くの宣教師たちが世界中を巡って来ました。そして「全ての民を弟子にしなさい」「洗礼を授けなさい」「教えなさい」と言われた通りに、宣教師たちは行く先々で、現地の人たちをそれぞれの宗教からキリスト教に改宗させ、教育し、洗礼を授け、クリスチャンにしてきました。そのために、今ではキリスト教は「世界三大宗教」の一つと言われるまでになりました。しかし、ここでイエス様が言われていることは、本当に「世界中の人々をキリスト教徒に改宗させなさい」ということなのではないでしょうか。世界の歴史を見ると、宗教は国家権力と結びつき、また宗教を語る戦争も多くありました。キリスト教宣教の「負の歴史」とも言うべきそれらの歴史を振り返る時、イエス様の思い、命の神の御心というものは、それらを更に越えているのではないかと私は思います。

そもそも「弟子」(19a)とは、師匠や親方の身振り手振りを見よう見まねで習い覚えていく存在です。ですから、ここで言われているのは「キリスト教を信じる者になりなさい」ではなく、「キリスト・イエスの言葉と振る舞いに見習う者になりなさい」ということではないでしょうか。また「父と子と聖霊の名によって洗礼(バプテスマ)を授けなさい」(19b)とは、原語のギリシャ語では「父と子と聖霊に向かって、身を沈めさせなさい」です。父と子と聖霊、即ち命の神、イエス・キリストの中に全身全霊を沈めていくこと。言い換えれば 20 節 b で「いつもあなたがたと共にいる」と言われている復活のイエス様と「いつでも共に生きていきなさい」ということなのだと思います。

20 節の「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という言葉は、生まれた時から「インマヌエル(私たちと共におられる神)」と呼ばれたイエス様のことを、再度表している言葉です。日本語(和語)の「かみ」という言葉は、大槻文

彦によると『古事記』にある「隠り身(かくりみ)」から来ているのではないか(『大言海』)とのことですので、隠れていて目には見えないけれども、確かに存在しているものという意味合いが強いかと思います。しかし、聖書が伝える命の神は、目には見えないものでありながらも、いつでもどこでも共におられる存在であり、かつイエス・キリストという目に見える姿でこの地上を生き、歩まれました。そしてまた死から復活させられて、今も多くの人々の中に、そしてそれらの人々の生き様を通して、私たち一人一人に関わってくださっています。

復活のイエス様、命の神は、今も、かつて、いつまでも、私たち一人一人の命と共におられます。だからこそ私たちは絶望しそうな中にあっても、「希望を失わない」(ローマ 5:5)、「四方から苦難を受けても行き詰まらず、途方に暮れても失望しない」(コリントⅡ4:8)とすることが出来るのだと思います。死から引き起こされる命がある。絶望で終わらない希望がある。イエス・キリストの十字架と復活の出来事は、そのことを今を生きる私たち一人一人に示してくれているのだと思います。

全ての命を「極めて良いもの」(創世記 1:31)として創られた命の神の御心に反して、この地球や全ての命を何度も破壊し尽くす暴力が、この現代世界を席卷(せっけん)しています。しかし、その中にあっても、「死も命も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはでき」(ローマ 8:38-39)ません。だからこそ、神様がいつも共にいてくださることに信頼して、歩みを進めて行きたいと願います。八方ふさがりで、どうしようもないとしか思えないような時であっても、事実から目を背けることなく、事実^{じじつ}に目を向けて、それでもやってみようと模索する人の友になりたい。やってみても出来ないかもしれないけれども、出来る所まででもやってみたいという人の隣に立って、共に挑みたい。そこに、死では終わらない復活のイエス様、神と人と共に生きる生き方があるのだと思います。

神、共にいます。今も、かつて、いつまでも。いつも一緒におられる神様に励まされ、導かれながら、私たちは今日もここから「正義と平和と喜び(=神の国)」(ローマ 14:17)を造り出す道へと歩みを進めていきます。